その夜は住職から紹介してもらった宿に一泊し、翌日家へ向かった。これで私の戦後に一応の終止符を打てたのではないかと思いつつ帰途についたのである。

通化県農業試験場・ソ連参戦・抑留の五年間

愛知県　板倉利長

私は、長野県下伊那郡亘開村に生まれました。両親は健在で、八人兄弟の長男でした。天竜川が近くを流れ、南アルプスと天竜川を眺めて大きくなったようなものです。八人兄弟でうち姉妹が五人です。

義務教育を終了するとすぐ家事の農業の手伝いです。猫の額のような田や段々畑の雑穀の手入れやらで結構忙しい毎日でした。

支那事変が始まってから、小さい村でしたが、めっきり若い人の姿が少なくなりました。時に満州国が建国以来、満州国は五族協和の国であり、日本人がその中心になるのだと大きく叫ばれていました。中心になるため満州国の人口の一割は日本人で占めるべきだとの国策論が声高に唱えられ、徴集前の若者の満州移住が大きく採り上げられました。

町役場にも、村の掲示板にも「行け！　満州へ」のポスターがたくさん貼られました。開拓移民には二通りありました。一つは分村という形で村の一割が満州国の荒野に新しい村を作る形式です。今一つの形は、満州国の荒蕪地に農業試験場なり開拓団を設置し、開拓の暁には分与するという計画のようでした。

そのため茨城県内原に「内原訓練所」が設置され、全国的な規模で開拓民の訓練が行われました。

長野県も東北各県と肩を並べ、この国策に協力し、多くの開拓民、開拓団を満州に送りました。開拓民は国策移民と称せられ、一旦緩急あれば軍の補強という考え方も強かったようです。

大東亜戦争の始まる直前の昭和十六（一九四一）年十月に県の強い奨めで、満州国通化県にある農業試験

場に勤務することとなり、仲間の者、数人と渡満いたしました。

若さというか、のん気というか、身分とか給与に関心が薄く、長野の自宅の農事手伝いのつもりで現地に適する雑穀、野菜等の播種、栽培に力を入れて研究しました。ところが思わぬ出来事が突発したのです。

私たちは試験場で研究に専念し、外部との連絡も比較的少なく、一途に王道楽土の建設に邁進していました。戦局についてもラジオ等を通じて承知していましたが、南方戦線で破局的局面を迎えているとは夢にも思っていませんでした。

しかし、さすがに漢人、満人、朝鮮人は戦局の推移に精しく、日本軍の劣勢化を掌握しておったのでしょう。また彼らなりの闇の情報網を持っていたのでしょう。突如、県庁職員全体が日本に反乱を起こしたのです。

主謀者の朝鮮人の王金戴は日直で県庁内の金庫・倉庫の全部の鍵を保管していました。弾薬庫、兵器庫、被服庫、留置所のドアを全部開放しました。トラックの荷台に機関銃を備え付け、入ってくる日本人を射殺し始めました。

日本の警察官は松花江（ショウカコウ）を渡り、対岸の方正県の県庁に急報、県庁では直ちにハルピンとジャムスの関東軍に出動を依頼し、関東軍は通化の両側から包囲攻撃を開始しました。数時間後、反乱隊は総崩れとなり、主力は高安嶺の山中に逃げ込んで行きました。

山中から反乱の仲間に出た連絡員は関東軍の哨兵に発見され、芋づる式に主謀者は捕獲され、首脳部は全員銃殺、他は監獄に入牢され、事件は落着しました。農事試験場で働いていた者は、作業に従事していたため全員無事でした。

反乱終了後、開拓団へ帰り青年団に入隊しました。仲間たちと話し合い、全員軍隊に志願する決心をしました。願書を作成、通化県庁に提出しました。県庁は全焼したため仮廠舎の警察官に届けました。

昭和二十年五月、牡丹江（ボタンコウ）のカボリン部隊に入り衛生兵になりました。本科の訓練を受け、一カ月後、衛生兵の教育を受けるため大連近郊の第八陸軍病院（温衆

病院）に派遣になり、そこで訓練を受けました。

突如、ソ連が参戦。

訓練も中止となり、終戦を迎えました。それからは、毎日、何箱、何十箱の書類の焼却に従事しました。重要書類かどうかの区別も分かりません。毎日、天を焦がす煙を見て暮らしました。しばらく経つと奥地から引揚者が続々と引き揚げて来ます。乞食同然の姿で満鉄の線路沿いに大連を目指して集まってきます。

大連は兵站基地として銃器、弾薬の他に、被服・食糧・什器類も多く備蓄していました。奥地からの引揚者の散髪をやり、お結びを支給する、そんな生活が病院の仕事の合間を縫って一カ月ほど続きました。

引揚者の中には、大連についてホッとして息を引き取る人、歩行困難なため入院志願する人、いろいろおりましたが、無事、朝鮮なり日本に脱出できたのか、一衛生兵の身で知る由もありません。

病院長は金城正樹中佐でした。患者の中に歩行不可能の人、呼吸困難な人も大勢おり、中には自ら生命を絶つ人もおりました。病院は軍隊と異なった困難を抱えこんでいるようでした。軍人、民間人、健常人、病人みな混在で明日の事は誰にも分かりません。

そんなある日、一片の命令が出ました。「歩行できる軍人のみ、奉天（瀋陽）の北寮へ引率し、集合する」。戦車隊ほかの兵隊もみな同じで、北寮に集結しました。歩行できない軍人はというと、自ら生命を絶つ人、半強制的に自殺を強要された人、いろいろあったとの噂を耳にしました。

大連から北寮に集まった軍を五十大隊に編成し、シベリア行きとなりました。十一月の厳寒のことでした。

イルクーツクに約三カ月滞在、その後シベリアの各収容所に分散収容されました。病院関係の将兵はホタルウイハへ行き、ドイツ兵の捕虜と交替しました。

われわれは健康者と弱兵に分けられ、健康者は木材の伐採、搬出のノルマが科せられました。一部はシベ

リア鉄道の輸送品の荷揚げの使役となりました。

隣村の開拓団の人が近くの抑留地まで連絡に来られ、偶然出会った時はお互いに涙をこぼし健康と無事を喜びあいました。

昭和二十一年、二十二年、二十三年と強制労働に従事し、二十三年に舞鶴に復員しました。

今も折にふれ、振り返るのですが、昭和十六年、国策に沿って満州国の開拓団に入団し、数年後、軍隊に現地入隊、初年兵教育が終了するかしないうちにソ連軍の侵略、訳の分からないうちに捕虜となり三年、シベリアで強制労働に従事しました。

シベリアの強制労働については、多くの人が本に書き、また講演などもしているので、ここでは書きますまい。

隣にいる戦友が一晩明けると丸太になり、雪の下に葬られます。「生」と「死」に紙一重の差もないのです。

復員して村でブラブラしているうちに、人の紹介で神奈川の廣田博さんの農場と農園の手伝いをしました。後で聞いたことですが、廣田さんの母親は、伊藤博文の女中頭をやった人で、しっかりしていました。

世の中が落ち着いてくると、長野県も御多分に、満州からの引揚者の対策に困り、国有地の開放、荒蕪地の開墾に力を注ぎました。全国に開拓農協を作り、引揚者の団結にも努力したようです。

私も農林省や長野県庁に日参し、ようやく愛知県の知多半島で土地を借りることができました。戦前の軍の演習地跡です。

そこで開墾と造園を手掛けていましたが、時世の推移により造園の仕事が軌道に乗り、ほっとしました。

現在、家業は長男夫妻に譲り、一緒に暮らしています。